

「時空間セックス」

菊池涼太

登場人物

岩本豊介（27） 宅配ドライバー

富永元子（34） 高校の音楽教師

岩本昭恵（56） 岩本の母

富永茂雄（60） 元子の父、物理教師

富永文代（60） 元子の母

鈴木ちか（27） 岩本の同級生

生徒 1 ～ 4

元子の大学の友人 1

ラーメン屋のご夫婦

あらすじ

地元の横浜で配達作業中のドライバー岩本豊介（27）は、通っていた高校への配達物を持って、正門へ向かっていた。その高校には、現在付き合っている富永元子（34）が音楽教師として勤務している。二人が出会ったのもまたその高校で、生徒と教師の時だった。音楽室から聞こえてきたピアノの音に、当時を思い出す豊介。

回想の中で、音楽の補習を受けようとする豊介と、すっかり忘れていた元子。何も起きてはいないが、色々な勘違いから、ドキドキする豊介。二年後の同窓会で再会した二人は、ひよんなことから付き合い始める。ベッドの上で、あの音楽室での真相、お互いの感情を知る二人。元子の友達のパーティーに参加したり、少し喧嘩したり、様々な出来事を思い出した豊介は、プロポーズを決意する。

正門へと辿り着いた豊介、廊下を歩く元子を見つけ『元子！』と呼びかける。元子も過

去を色々と振り返り、豊介の気持ちに応え、キスをする。そして、学校でキスをした元子は……謹慎をくろう。

函館の実家に帰省した元子は、物理教師の父親、富永茂雄（60）から相対性理論の授業を受ける。小さい頃からそういう家庭で育ってきた元子は、母親の富永文代（60）からも催促され、しぶしぶ受け入れる。しかし、喧嘩をして出ていく元子。すると豊介から電話が掛かってくる。豊介は母親の岩本昭恵（56）に叱咤され、あの日以降、広がっていた距離を埋めようと電話してきたのだ。横浜と函館にある、それぞれの赤レンガ倉庫の話から、横浜の大きな観覧車、函館にある日本最古の観覧車へと話は移る。そして、二人は……時空を超えてセックス。決して夢じゃない、確かな感触があるセックス。それが再び、二人を引き寄せるのであった。

○道路（夕）

配達業者のワンボックスカーが停まっている。後ろのドアを開き、座っている岩本豊介（27）、高校の校庭を見つめている。

豊介「母校に配達する日が来るとは」

豊介、温かいお茶を飲み、

豊介「まだ居るかな、元子のやつ」

豊介、小さな荷物を取りドアを閉め、正門へと小走りで向かう。途中、ピアノの音が聞こえてきて、立ち止まる。

○（回想）高校・廊下

日が差し込む廊下。

豊介N「元子とは、高校生の頃に出会った」

岩本豊介（当時18歳）、歩いている。

豊介「あー音楽の授業で補習なんて聞いたことねえよ」

豊介、階段を上り、一番奥の音楽室に辿り着き、中に入る。

○（回想）同・音楽室

入ってくる豊介。

豊介「失礼しまーす」

誰も居ない。

豊介「あれ、ってか寝みー」

豊介、黒板に何かが書いてある事に気付く。

豊介「世界、三大、きよ……こう、交響曲？」

黒板には世界三大交響曲、『ベートーヴェン、運命』『ドヴォルザーク、新世界より』『シューベルト、未完成』と書かれている。

豊介「え、こっち系の補習？座学かよ、余計眠いじゃん」

豊介、背伸びをしながらウロウロして  
いると、急にドアが開く。

豊介「うわっ」

と、ビックリして椅子に座る豊介。

ドアの前に立っている富永元子（当時

25歳）。

豊介 N 「同級生じゃなく、先生と」

豊介 「……」

元子、ゆつくりと豊介に近づいていく。

豊介 M 「え、え」

豊介、元子の足音が、静かな音楽室に  
反して大きく聞こえる。

豊介 M 「な……なんだこの感じ、なんで無言  
なんだ先生。いつもより……色っぽいぞチ  
クショー！」

豊介、自分の心臓の音と、元子の足音  
がリンクする。

豊介 M 「くっ、俺の工藤静香に……いや、鼓  
動静かにしてくれ」

豊介、思わず目を逸らして閉じる。

豊介 M 「ダメだ、目と目で通じ合えない、落  
ちつけ俺、落ちつけ豊介」

豊介、呼吸を整え、目を開ける。目線  
の先にはベートーヴェンの絵が飾って  
ある。

豊介 M 「べ、ベートーヴェン？ま、まさかこれって……運命！」

豊介の頭の中でベートーヴェンの『運命』が流れる。

豊介 M 「やめてくれベートーヴェン！」

元子、ゆっくりと近づいて来ている。

豊介、頭を抱えながら悶える。

豊介 M 「やばいやばい、マジでやばい、先生が来てから、俺のハートビートが止まらね

え」

豊介、苦しみながらも視線を元子に戻す。しかし、ピントを合わせられない。

豊介 M 「うっ、直視できない」

豊介、元子越しの壁に、ドヴォルザークの絵を見つける。

豊介 M 「ん？……これはまさか……はっ！これ以上はやめてくれ、ドヴォルザーク！」

豊介の頭の中で、ドヴォルザークの『新世界より』が流れる。

豊介、伏し目がちに何とか前を見るが、



元子の足元しか見れない。元子の足が、  
『新世界より』に合わせてゆつくりと  
近づいて来る。

豊介 M 「襲われちまうぞ、……こうなったら  
腹くるしかねえ！これが、大人の世界……  
……いや、新世界だ」

豊介、姿勢を正し、目を閉じながら真  
っ直ぐに前を向く。

少しの間。

元子、豊介の前で立ち止まる。

豊介 M 「はうっ」

豊介、頭の中で高い音が一音だけ鳴る。  
ゆつくりと目を開ける豊介。そこに元  
子の姿は無い。

音楽室に柔らかい風が入ってくる、ピ  
アノ上の譜面がパラパラとめくれ、シ  
ューベルトの『未完成』のページにな  
る。

豊介 N 「とまーこん時はこれ以上の事は無く  
て、二年後の同窓会で再会した」

○（回想）居酒屋（夜）

豊介、鈴木ちか（当時20歳）を含めた

高校の同級生と同窓会している。

豊介 N 「大学に行ってる友達が楽しそうで、  
何でか分からないけど、仕事終わって、家  
帰って、シャワー浴びて、また作業着に着  
替えて、店に行った」

元子、やってきて、

豊介 N 「みんなで盛り上がって、元子が顔出  
してくれて、忘れられない元カレの話とか、  
生徒と先生の関係だと聞けないような話  
もして、時間の流れを実感したけど、当時  
流行ってた国民的少年マンガの、修行して  
二年後に再会する、ってのを思い出して、  
あん時のモヤモヤも相まって、変なスイッ  
チが入った」

豊介 「先生そういえばさ」

元子 「ん？なに」

豊介、周りを気にして、

豊介「まあいいや、連絡先教えてよ」

元子「まあいいやって何よ」

豊介「今日だって鈴木と連絡とって来てくれたんでしょ？あいつが知ってるなら俺もいいじゃん」

元子「え、うん、別にいいけど」

皆でシメの雑炊を食べている。

豊介N「連絡取り合うようになって、誘った割と会ってくれて、付き合う事になった」

○（戻って）道路（夕）

豊介、校舎を見つめた後、再び正門に向かう。さっきの小走りではなく、歩いて向かう。

○（回想）元子宅・リビング（夜）

自宅デート中の元子と豊介、ソファーに座ってバラエティ番組を観ている。

豊介「くだらねえ、はは」

豊介、笑っている。

元子、つまらなくて食器を片づける。

豊介 N 「ジェネレーションギャップってやつで、笑いのツボは全然合わなかったけど」

○（回想）同・寝室（夜）

ベッドに入っている元子と豊介。

豊介 「あーそういう事だったのね」

元子 「私も必死だったんだから」

豊介 「恥ずかしいー、もう交響曲が頭ん中でグルグルだったよ」

元子 「ははっ、それ何なの、面白いんだけど」

豊介 「もう一生忘れられないわ」

元子 「勉強になったね」

豊介 「でも俺はシューベルト超えるけどね」

元子 「何言ってるの、ピアノでも始めるの？」

豊介 「ちげーよ、未完成じゃ物足りねー」

元子 「え？」

豊介、元子に馬乗りし、Tシャツを脱ぐ。

豊介「完成させてやるぜ、おりゃ」

豊介、元子に身体を求める。

元子、それに応える。

豊介「交わって響くと書いて交響曲だ」

元子「ふふっ、バカじゃないの、もう」

掛け布団が激しく動いている。

豊介N「元子のツボは押せる方だった」

元子「いやん」

豊介N「エッチな意味じゃなくて」

○（回想）レストラン・店内

貸切パーティー中のグループ。

やってくる、元子と豊介。

豊介N「何年かして、元子の大学の集まりに連れてかれた。ボタンを閉めた方が良いか、閉めない方が良いか、分からないジヤケットを羽織り、細いグラスのお酒を飲んだ。最初は緊張してたけど、すごく良い人達で楽しかった。仕事やら海外やらの面白い話を聞いて、思わず声に出して笑っ

た」

豊介「ははっ」

静かな空気。

豊介N「でも周りの人達はほとんど『勉強になるねー』と言っていた。ボタンの開け閉めにも飽きて、鳴ってない携帯を耳に当てて」

豊介「ごめん、欠員出たって、仕事行くわ」

と、元子に、

元子「え……うん、駅まで」

豊介「大丈夫大丈夫、じゃ」

豊介、出ていく。

元子「……」

○（回想）道

豊介、帰宅中。

豊介N「嫉妬とかじゃないけど、要は疲れちゃった。だから帰った。仕事してる感をまた出してしまった事で、酔いも覚めた」

○（戻って）道路（夕）

豊介、正門へと歩いている。

○（回想）元子宅・リビング

豊介、パソコン作業中。

元子、帰ってきて、

元子「どうしたのパソコン、買ったの？」

豊介「友達の」

元子「何してんの？」

豊介「アプリ作ってる」

元子「え、アプリ？急にどうしたの？」

豊介「副業の時代だし、二つ三つ収入源が有ってもいいかなって。ほら失う物ないじゃん、もしダメでも、飲食とかと違って」

元子「……そうだけど」

豊介、電話をする。

豊介「もしもし、やっぱりさ一個人より、企業に向けての方が中長期的にみても良いと思うんだよね、うんうん、いやこれをノールリスクでチャレンジできるのはマジで

でかい」

元子、買ってきた食材を整理していく。

豊介 N 「学生ん時からバイトしてた所で、そのまま社員になった俺は、他の仕事もしてみたくて……いや嘘、結局……嫉妬してた」

元子 「なんか食べたいものある？」

豊介 「今日はいいや」

元子 「……」

豊介 N 「実家暮らしで、元子んちで半同棲みたいな生活をしていて、その距離感がよかったのか、別れはしなかった」

○（回想）元子の実家・和室

元子と豊介、テーブルを挟んで向かいに富永茂雄（60）と富永文代（60）、座っている。

豊介 N 「案の定副業はすぐやらなくなって、向こうがそれなりの年齢になって、親に催促されたのか、正月に挨拶に行くことにな



った。」

豊介「そうですね、去年から副店長になりました」

元子「一昨年じゃなかったっけ？」

豊介「違うよ去年だよ」

元子「今日一月三日だよ？」

豊介「……一月三日に言う去年は一昨年だろ」

元子「は？」

豊介「そ、そういうこと」

元子「いや、どういうこと？」

豊介「だから、えーと、中三から高一になる

間の春休みに、今何年生？って聞かれたら、  
高一ですって言うでしょ？」

元子「……まあ」

豊介「それよ」

元子「どれよ」

豊介「それと一緒に」

文代「……頑張ってるならいいじゃない」

豊介N「ややウケだった」

元子「はいはい」

茂雄「ま、いいからいいから」

と、豊介にビールを注ぐ。

文代「どちらかというの中三の方が、たとえば適してると思うけど、ふふっ」

○（戻って）高校・正門（夕）

豊介、正門に辿り着く。

廊下を歩いている富永元子（34）を見  
つけ、

豊介「元子！」

元子、豊介に気付き、小走りで入口に  
向かう。

豊介、正門から下駄箱がある入口へと  
向かう。先に入口に着いた元子。

○（少し遡り）高校・音楽室（夕）

元子、ピアノを弾いている。

○同・廊下（夕）

元子、歩いている。

豊介の声「元子！」

気づいた元子、

元子「何やってんのあいつ」

と、小走りで入口に向かう元子。

すぐに止まって、

元子M「ちよっと待ってなんか持ってなかった？

小さい箱……え、もしかして指輪？…

…プロポーズ？！」

○（回想）高校・廊下

元子、小走りで音楽室に向かっている。

元子「もう、完全に忘れてた」

元子N「あいつと出会ったのは9年前」

○（回想）同・音楽室

豊介、背伸びをしながらウロウロして

いる。入ってくる元子。

豊介「うわっ」

と、ビックリして椅子に座る豊介。

元子M「階段上ったら息が、声でない」

元子、豊介のファスナーが開いている  
事に気付く。

元子M「チャック全開じゃん」

元子N「あの時が始まり……になっていたらしい」

元子、豊介に歩み寄る。

元子M「どうしよ、思春期の子になんて言え  
ば……」

元子、豊介に近づく。

元子M「ちよつと待って、ゆるキャラがこつ  
ちを見てる……可愛いゆるキャラが社会  
の窓からこんにちはしてる……って何パ  
ンツ見てんのよ私。いや違う違う、あくま  
でチャックの状態を確認してるのよ、壊れ  
てないかしら」

元子、さらに近づく。

元子M「岩本君さっきから悶えてるけど何？  
悩み事？それともチャック閉めてないこ  
とに気付いたの？」

元子、豊介の前に着く。

元子 M 「目瞑ってる、これは……無かったことにしてくれて……事？あーどうしよ、もうこうなったら、エイ！」

元子、豊介のファスナーを閉める。

元子、その場を後にする。

元子 N 「恥ずかしいかなと思って、補習はまた今度にした」

### ○（回想）居酒屋（夜）

豊介、鈴木を含めた高校の同級生と同窓会している。

元子 N 「あいつが卒業してから二年後に、鈴木さんから連絡がきて、みんなに会いに行った」

元子、やってきて、

元子 N 「音楽教師の私は担任を持つことが少なくて、卒業生と会うみたいな事が全然なかったから、嬉しくて色々話しちゃった。元カレが忘れられないとか、最近『俺が忘れさせてやる』って言う男が居るとか。そ

したら」

豊介「何そいつ、やめとけば？」

鈴木「えー良いじゃん、かつこいいじゃん。

私も言われてみたい」

豊介「それでもよくね？別に」

鈴木「え？」

豊介「忘れる必要なくね？そもそも。一緒に居れば良いだけだし、そんな小っちゃえー男やめとけば？」

元子「……」

鈴木「バカだね岩本。そもそもね」

元子N「えー……」と思って、可笑しくて可笑しくて……久々笑った。その後も連絡取ったり会ったりして、向こうも成人してるしいいかなって、付き合った」

○（戻って）高校・廊下（夕）

元子、階段を降りている。

○（回想）元子宅・リビング（夜）

自宅デート中の元子と豊介、ソファーに座ってバラエティ番組を観ている。

豊介「くだらねえ、はは」

豊介、笑っている。

元子、つまらなくて食器を片づけ、キッチンから豊介の背中を見ている。

元子N「肩で笑ってるあいつ。今思えば、惚れたのは私の方だったのかも」

元子、洗い物をする。

#### ○（回想）同・寝室（夜）

ベッドに入っている元子と豊介。

豊介「あーそういう事だったのね」

元子「私も必死だったんだから」

豊介「恥ずかしいー、もう交響曲が頭ん中でグルグルだったのよ」

元子「はは、それ何なの、面白いんだけど」

豊介「もう一生忘れられないわ」

元子「勉強になったね」

豊介「でも俺はシューベルト超えるけどね」

元子「何言ってるの、ピアノでも始めるの？」

豊介「ちげーよ、未完成じゃ物足りねー」

元子「え？」

豊介、元子に馬乗りし、Tシャツを脱ぐ。

豊介「完成させてやるぜ、おりゃ」

豊介、元子に身体を求める。

元子、それに応える。

豊介「交わって響くと書いて交響曲だ」

元子「ふふ、バカじゃないの、もう」

掛け布団が激しく動いている。

元子N「笑いのツボは合わなかったけど、私のツボは押してきやがった」

元子「いやん」

元子N「エッチな意味も含めて」

○（回想）レストラン

貸切パーティー中のグループ。

やってくる、元子と豊介。

元子N「何年かして私の大学の集まりに連れ



てった。というか『楽しそうだなー』『いいなー』と雰囲気を出してくるから、高校で出会った出入り業者の人、という嘘じゃない嘘で連れていった」

豊介「ははっ」

静かな空気。

元子N「初対面感はあるけど、楽しそうだし、まいっかと思ってたら」

豊介「ごめん、欠員出たって、仕事行くわ」

と、元子に、

元子「え……うん、駅まで」

豊介「大丈夫大丈夫、じゃ」

豊介、出ていく。

友人1「……ドライバーさんじゃなかったっけ？お酒飲んで」

元子「……ノンアルコール、飲んだんじゃないかな」

元子N「……その日は友達を優先した」

○（戻って）高校・廊下（夕）

元子、入口に向かってる。

○（回想）元子宅・リビング

豊介、パソコン作業中。

元子、帰ってきて、

元子 N 「後日『別に行きたいなんて言っ  
てない』とか言うもんだから、私も言い返して、  
少し喧嘩になった」

豊介、電話をする。

豊介 「もしもし、やっぱりさ一個人より、企  
業に向けての方が中長期的にみても良い  
と思うんだよね、うんうん、いやこれをノ  
ーリスクでチャレンジできるのはマジで  
でかい」

元子、買ってきた食材を整理していく。

元子 N 「ちょっとした喧嘩って、難しくて、  
謝るものなんかなく、思っただけ、美味いご  
飯作ろうとした」

元子 「なんか食べたいものある？」

豊介 「今日はいいや」

元子「……」

元子 N 「肩で笑わなくなったあいつ。副業やめるって言われた時は、続ければいいのにつて言ったけど、戻ってくるって思った、肩が」

○（回想）高校・音楽室

生徒 1 の相談を受けている元子。

元子「誰にだってミスはあるよ」

生徒 1 「一緒に練習するの……嫌で」

元子「みんな気にしてないと思うよ」

生徒 1 「思い出さなくて……練習練習つて、練習に集中しようって」

元子「うん」

生徒 1 「そしたら余計に浮いてる気がしてきて。前向きじゃないって思えば思うほど……気づいたらその時の事考えてて」

元子「うん」

生徒 1 「音楽室の前まで来たけど……後ずさりしちゃって」

元子「そっか」

生徒1「……うん」

元子「じゃあこういうのはどう？」

生徒1「……」

元子「いっそ、後ろを向く」

生徒1「え？」

元子「そんでもって後ずさりする、そうすれば進んでるでしょ、前に、結局は」

生徒1「……どういことですか？」

元子「だからね」

と、実演する元子。

元子「ね」

生徒1「……ふふっ、そうですね」

元子「でしょ？」

生徒1「先生ってそういう事言うんですね」

元子「ん？」

生徒1「いえ、なんでもないです。明日からまた、よろしく願います」

と、去っていく生徒1。

元子N「似たような事言っちゃった、私の実

家で、スベってた豊介と。お父さん、普段あんまり飲まないのに、あんなに飲んじやって、あれ……私、何でこんな事思い出して」

○（戻って）高校・正門（夕）

豊介、正門から下駄箱がある入口へと向かう。先に入口に着いた元子。

豊介「俺さあ、元子に出会ってから、色々悩んだり、つーか出会ってからの方が悩むこと多くなつてさ、すげーモヤモヤすんだよ。ただでさえ先の事なんて分かんねーのにさ、ますます分かんなくなって、もうわけ分かんねえよ」

元子「静かにして、ここ学校だよ」

豊介「あん時から、俺のビートは止まらねえんだよ、終わらねえーんだよ、ずっと未完成のまんまなんだよ」

元子「他の職員さんも居て……、笑われちゃうよ、ちょほん」

豊介「（遮って）俺の目には、お前の笑顔しか  
映んねえし」

元子「……」

豊介「ずっと……新しい気持ちだか、感情だ  
か、なんか生まれてくるんだよ。だから  
気づいたんだ、気付いたんだ今さっき。……  
恋は、するもんじやない、落ちるもんで  
もない……」

元子の元に辿り着く豊介。

豊介「生まれるもんなのになって」

少しの間。

元子、一歩近づき、

元子「……生まれるのは、恋じゃなくて愛だ  
よ、ばーか」

元子、豊介を引き寄せ、キスする。

元子M「時折、こいつに救われる」

元子、左手を差し出す。

豊介「今度買いに行こ」

元子「え？」

豊介「その前にハンコ」

元子「……え、そうだけど。今着けてよ」

豊介「ん？」

元子「指輪、それ着けてって」

豊介「これ？」

元子「うん」

豊介「これ配達だよ」

元子「え？」

豊介「インク、コピー機の」

元子「インク？いつも業者さんが」

豊介「冬休みなんじゃない？まだ三日だし。

あんまないもんインクの荷物なんて。中島

さん宛になってるよ」

元子「事務員の中島さん、あっ、あーそうい

う事ね」

豊介「ははは」

元子「ははは」

豊介M「まあいっか」

元子M「なにこれ？」

○高校・廊下

体育館での始業式に向かう生徒達。

生徒 2 「冬休み終わっちゃったね」

生徒 3 「ねー、ってか聞いた？ 富永先生居なくなるらしいよ」

生徒 2 「音楽の富永？」

生徒 3 「そうそう」

生徒 2 「え、何で？」

生徒 3 「分かんないけど」

生徒 4 、やってきて、

生徒 4 「ねえねえ、富永の話？」

生徒 3 「うん」

生徒 4 「うちのママ PTA なんだけどね、噂だと」

生徒 2 「うんうん」

生徒 4 「なんかね、学校に男連れ込んで」

○元子の実家・和室

元子、寝転んで煎餅を食べている。

文代、やってきて、

文代 「いつまで休みなの？」



元子「三月いっぱい」

文代「急にどうしたのよ」

元子「謹慎くらった」

文代「謹慎？ あら何したの？」

○道路

荷台をけん引した配達用の自転車が停まっている。

豊介、乗りながら、高校の校庭を見つめている。

学校のチャイムが聴こえる。

豊介、帽子を深く被り、自転車を漕ぎ出す。

○岩本宅・リビング（夜）

豊介と岩本昭恵（56）、テレビを見ている。

昭恵「あんた最近、元子ちゃんのところ行かないわね」

豊介「うん」

昭恵「うんじゃなくて」

豊介「うん」

昭恵「理由を聞いてんのよ」

豊介「謹慎になって、実家に帰ってる」

昭恵「ふーん」

豊介「……」

昭恵「あんたのせいか」

豊介「……俺はあくまでも着火剤で、点火し

たのは向こうよ」

昭恵「ダサい男だねえ、誰に似たんだか」

豊介「いや、だからその」

昭恵「息子の不貞話なんて聞きたかないよ」

豊介「……」

○元子の実家・和室（夜）

元子、昼間の態勢のまんま。

茂雄、帰ってきて、

茂雄「帰ってくるなら連絡ぐらいよこしなさい」

い」

元子「ごめんなさい」

茂雄「学校は良いのか？もう三学期始まるだろ」

文代、夕飯を持ってきて、

文代「学校に男性の方を連れ込んだんですって」

茂雄「なに！？」

元子「ちよお母さん」

茂雄「どういうことだ」

元子「違うって、（お母さんに）変な言い方しないで」

茂雄「説明しなさい」

元子「だから違うって」

文代「久々にやりますか？お父さん」

茂雄「もちろんだ、持ってこい」

文代「はいお父さん」

文代、出ていく。

元子「もう」

茂雄「ふん」

元子「もう定年退職したんじゃないの？」

茂雄「そんなもん関係あるか」

文代、ホワイトボードを持ってくる。

文代「はいお父さん」

茂雄「よし」

元子「本当にやるの？」

文代「（元子に）定年退職してから、教えたい

欲がさらに強まっちゃったみたい」

元子「はあー」

茂雄「座れ！」

元子、正座する。

茂雄「それでは物理の授業を始める、礼！」

元子、しぶしぶ礼。

茂雄「つとその前に、よく謹慎処分で済んだ  
な？」

元子「え、まあ、うん」

茂雄「男子高校生に手出しておいて」

元子「いや違うって」

文代「去年うちにきた男性でしょ？」

元子「……うん」

茂雄「まったく、そんなことさせる為に東京の  
大学に進学させたわけじゃないぞ」

元子「……色々事情があって」

茂雄「……」

元子「向こうがいきなり学校に、職場に来て、最初は困惑したけど、私もそれに乗っかってというか、火に油を注いってしまったというか」

茂雄「ふむふむなるほど、要は相対性理論だな」

元子「え、どこが」

文代「ふふっ」

茂雄「火元の原因、向こうは元子だと思って  
いる可能性もある」

元子「どっちのせいとかじゃないけど」

茂雄「どっちにとってもそれで良い」

元子「もう何言ってるの」

茂雄「どちらも正しいという事だ」

元子「はいはい、別に喧嘩したとか、別れたとか、そういうわけでもないし」

文代「じゃーなんで帰って来たの？」

元子「……どうしていいか分かんなくて」

茂雄「この世で最も速いものはなんでしょう？」

元子「もう」

文代「やらないと終わらないよ」

元子「始まっちゃった」

茂雄「新幹線や飛行機よりも圧倒的に速いものだ」

元子「光でしょ」

茂雄「正解、では光の速度はどれくらいでしょう？」

元子「えーと、どんくらいだったっけ」

茂雄「秒速約30万kmです」

元子「うん」

茂雄「これは1秒間に地球を約7周半する速さです」

元子「はい」

茂雄「ということは、地球の円周は」

元子「30割る7・5……約4万km」

茂雄「我々が住んでいるこの地球は、その円周約4万kmを自転して1周すると、一日が

経ちます」

元子「はい」

茂雄「これが何を意味するか分かりますか？」

元子「分かりません」

茂雄「考えてませんね」

元子「昔からずっと分かりません」

茂雄「分かります」

元子「すみません、よく分かりません」

茂雄「1秒で地球を約7周半する光は、2秒

で地球を15周、4秒で30周します」

元子「……」

茂雄「1周で一日なので、4秒で一ヶ月分進める、ないし戻れるのです」

元子「……」

茂雄「つまりは48秒で一年」

元子「……で？」

○岩本宅・リビング（夜）

豊介と昭恵、テレビを見ている。

昭恵「まだ帰って来ないの元子ちゃん」

豊介「うん」

昭恵「別れたの？」

豊介「別れてない」

昭恵「一か月会ってないなんて寂しいじゃない」

豊介「え、母さんそういうタイプだったんだ」

昭恵「女だもん」

豊介「うえっ」

○元子の実家・和室（夜）

元子、茂雄の授業中。

文代、アシスタント。

茂雄「えー光速に近い速さで動くと、その物体は縮んで見えます。が、動いている物体からすると、止まっている物体の方が、縮んで見えるのです」

元子「んー難しい」

茂雄「例えば、トンネルに向かって走っている新幹線、その新幹線の乗客からすると、トンネルの方がこっちに近づいている様



に見えることがあるだろ？」

元子「あー」

茂雄「簡単に言えばそういう事だ」

元子「まーなんとなくは、掴めたかな」

茂雄「もっと簡単に言うならば、恋みたいなものだ」

元子「え？」

茂雄「若い頃、母さんをデートに誘った時は、

もはや誘われている様なもんだったからな」

元子「暇だから授業付き合ってたけど、それはマジで分かんない」

文代「さあどうでしょうね」

元子「親の馴初めなんて聞きたくないよ」

○岩本宅・リビング（夜）

豊介と昭恵、テレビを見ている。

昭恵「さすがに向こうで男できたんじゃないかい？」

豊介「やめろよ」

昭恵「連絡とってるの？」

豊介「たまに」

昭恵「なんて？」

豊介「最初は『ごめん』って、そしたら『こっちもごめん』って。何日かして『元気？』って聞いたら『元気だよ』って」

昭恵「……へー」

豊介「何だよ」

昭恵「二人で盛り上がった後に、謹慎くらうってどうなのよ」

豊介「……」

昭恵「おさまりが悪いね」

豊介「……うん」

昭恵「嫌いにはなっていないみたいだけど」

豊介「……」

昭恵「あんたどんな不貞行為したの？」

豊介「大した事してない、ってか聞きたくねーって言ったじゃねーかよ」

○元子の実家・和室（夜）

元子、茂雄の授業中。

文代、アシスタント。

茂雄「かの有名なアインシュタインは、この難解な相対性理論を、男の子に説明する際にこう言ったという。『君が可愛い女の子と一緒にいる時間はあつという間に過ぎてしまっだろう、そういう事だよ』と」

元子「何回も聞いたわそれ」

茂雄「ユーモアかつシンプル、素晴らしい」

元子「確かに少しは面白かったよ、宇宙の話とか双子のパラドックスとか。ただ毎で毎回、物理の授業するの？説教したり『もうするなよ』って注意したり、言われたことないんだけど私、門限破った時もそうだったし。結局この長ったらしい授業が嫌で、ちゃんと門限守るようにはなっただけさ」

茂雄「……物体は、速く動くと重くなる」

元子「……え？」

茂雄「だから光の速さを超えられない」

元子「……は？」

茂雄「光速に近づけば近づくほど、質量が増えてしまう。だから光の速さを超えられない」

元子「はいはい、もういいって」

文代「いいから聞きなさい」

元子「……」

茂雄「ただ一つだけ、光を超えられるものがある」

文代「ふふっ」

茂雄「……思いだ」

元子「……またそんなこと言って」

茂雄「二か月前に言った事覚えているか？」

元子「え？」

茂雄「光は48秒で一年」

元子「あー、それね。覚えてる」

茂雄「今二か月前のことを一瞬で思い出した  
だろ？」

元子「うん」

茂雄「一年前のことだって、48秒もかから  
ずに思い出せる」

元子「……うん」

茂雄「光すらも、人の思いには到底追いつけない」

文代「美しいわ」

茂雄「ましてや、その思いが強ければ強いほどにだ」

元子「……うん」

茂雄「だから私は物理の授業をする」

少しの間。

元子「はあ？つまり人は心ってわけ？そんなこと分かってますけど、一応。ってか実際に速く動けるわけでもないし、意識の中の話でしょそれ？だから何？それを聞いてハッとして一歩前進した方がいい？ここが、今日この時が人生のターニングポイントでしたって言った方がいい？思った方がいい？難しい話にユーモア加えて、上手く話せてるつもりかもしれないけど、ただのこじつけでしょ？こっちは職場でキスしてんのよ、ましてや学校という職場で、

教職者という立場で。恋人の職場に来るタ  
イプの男とかマジで無いと思ってたけど、  
実際に来たらますます無いと思って、ただ  
それがプロポーズってなるとちよつと違  
くて、プロポーズだったのかも分かんない  
けど、場所があいつと出会った場所だった  
から、9年経ってまたあの学校に戻ってき  
たから、今までの嬉しかったことと、いま  
でやってきたこと壊しちやったなあと、職  
場の人にどう見られんのかなあと、もう時  
間が過ぎても過ぎても解決してくれない、  
一瞬で過去に戻るなら戻りたいわよ！」

出ていく元子。

文代「……」

茂雄「……ビッグバンだ」

文代「殴りますよお父さん」

茂雄「……女の人はいつ怒りだすかわからな  
い」

文代、出ていこうとして、

茂雄「え、母さんまで？」

文代「冷えるので、上着を持っていけます」

茂雄「お、そうか」

文代、出ていく。

茂雄「……」

#### ○道（夜）

元子、歩いている。

文代、やってきて元子に上着を渡す。

文代「まだ雪残ってるから気を付けて」

元子「……ありがと」

帰っていく文代。

#### ○金森赤レンガ倉庫・前（夜）

元子、歩いている。

#### ○岩本宅・リビング（夜）

豊介と昭恵、テレビを見ている。

豊介「上着クリーニング出しといて」

昭恵「はいよ」

豊介「もう仕事中着ないからさ」

昭恵 「昼間は暖かくなってきたもんね」

豊介 「うん」

昭恵 「お彼岸は仕事？」

豊介 「休み」

昭恵 「今年はおはぎ作らないよ」

豊介 「え、マジで？」

昭恵 「あんここねるの大変なのよ」

豊介 「なら仕事にすればよかった」

昭恵 「別に仕事の後でも食べられるでしょ」

豊介 「……親父の墓参り、お盆だと暑くて行く気にならないし、お彼岸ならまだ、おはぎもあるし」

昭恵 「買ってはくるけど、お店のやつね」

豊介 「つぶあんね」

昭恵 「分かってるわよ、お父さんもつぶあん派だったわね」

豊介 「つぶあんしか無かったからでしょ」

昭恵 「私がつぶあん好きだからね。あの人はどっちでもいいよって言ってたけど、外では『俺はつぶあんしか食べない』って言う



てたわ」

豊介「なにそれ」

昭恵「要は亭主関白ぶってたのよ、嫁が俺に  
合わせてるって」

豊介「あー」

昭恵「外でだけね、ダサいでしょ」

豊介「ダサいな」

昭恵「……あんたもね」

豊介「……なにがよ」

昭恵「あっちはまだ寒いんだろーね、誰かに  
暖めてほしいだろーね」

豊介「やめろよ」

昭恵「喧嘩もできないで」

豊介「いや」

昭恵「うじうじうじうじと」

豊介「……」

昭恵「時間さえ経てば、なんとかかなると思っ  
てる」

豊介「別にうじうじしてねーし」

昭恵「ふーん」

豊介「負い目はあるよ、そりゃーね。向こうは努力して教師になったんだろーし。それをなんつーか、壊しちゃったというか。このご時世にあんなことしたら、どうなるかわかってただろうに。でもなんかさ、その当時聞いてた音楽とか聞いたら、そんな時の事思い出す、みたいな事あんじゃん？それと一緒にさ」

昭恵「（遮って）本当にダサイ男だね！」

豊介「……え？」

昭恵「元子ちゃんは教師としての今後も悩んでると思う。けどね、そういうことじゃないでしょ？」

豊介「……どういうこと？」

昭恵「知らないわよ！」

豊介「えええ？」

昭恵「あんたの親父が居なくなつて、居なくなるよね、良い男になっちゃうの」

豊介「……」

昭恵「でも今のあんたは、元子ちゃんから居

なくなつたのに、ダサイ男のまんまだよ」

豊介「居なくなつたのは元子の方でしょ」

昭恵「だまらっしゃい！」

豊介「無茶苦茶じゃん」

昭恵「これだから実家暮らしの27歳は、いいから、……ハチャメチャに抱いてやんなさいよ！」

豊介「ああもう！」

豊介、出ていく。

昭恵「さっさと出ていけ」

○道（夜）

豊介、歩いている。

鈴木ちか（27）、自販機で飲み物を買って、

豊介「あ」

鈴木「あれ、岩本」

豊介「おう」

鈴木「久しぶり」

豊介「久しぶり」

鈴木「何してんの？」

豊介「んまあ、散歩」

鈴木「……」

豊介「あ、そっちは？」

鈴木「なにそれ、ちよつと寒くて」

と、お茶を見せる。

豊介「そう？」

鈴木「夜はまだ冷えるなって」

豊介「家に居りやいいのに」

鈴木「ちよつと買い忘れたもんあって、出る

時は気付かなくてさ、寒いなんて」

豊介「ま、お気をつけて」

鈴木「ふふっ、あんたもね」

豊介「何その言い方」

鈴木「大丈夫だって、私しか知らないから、

じゃね」

鈴木、去っていく。

豊介「ああああ」

と、空を見上げる豊介。

○横浜赤レンガ倉庫・前（夜）

豊介、歩いている。

○金森赤レンガ倉庫・前（夜）

元子、歩いている。

立ち止まり、携帯を見る。

元子「はあー」

着信が入って、

元子「えっ、もしもし」

と、電話に出る。

豊介の声「もしもし」

元子「はい、何でしょう」

豊介の声「いや、別に」

元子「あ、そうですか」

豊介の声「そっち寒い？」

元子「うん、めっちゃ寒い」

豊介の声「まだ雪あんの？」

元子「ちよつとね」

豊介の声「こっちも、やっぱり少し寒いわ」

元子「やっぱり？」

豊介の声「うん、やっぱり寒い」

元子「そう」

豊介の声「今赤レンガ散歩してるんだ」

元子「え、嘘？私も赤レンガ散歩してる」

○（戻って）横浜赤レンガ倉庫・前（夜）

豊介、電話しながら歩いている。

豊介「え、本当？」

辺りを見回す豊介。

元子「うん、こっちの赤レンガも負けてないよ」

豊介「ん？あーそういえばあるって言ってたね」

元子「あれ来た事なかったっけ？」

豊介「うん、聞いただけ」

元子「去年は……そっか、ラーメン食べに行っただ」

豊介「うん、しかも定休日やってないっていうね」

元子「そうそう」

豊介「味噌ラーメンかと思ったら、豚骨ラーメン紹介したいとか」

元子の声「いやーあの味は本当に食べて欲しい、めっちゃ美味しいから」

豊介「ラーメンはこっちも負けてないけどね」

元子の声「えーそうなの？地元出てから、あんまり食べなくなっちゃったから。なんていうかな、味というか、この寒いロケーションで食べるのが良いんだよね」

豊介「確かにそれはありそう」

元子の声「寒い嫌だけど、帰るたびに食べたくなっちゃう」

豊介「美味しかった？」

元子の声「ううん、まだ食べてない」

○（戻って）金森赤レンガ倉庫・前（夜）

元子、電話しながら歩いている。

豊介の声「……そっか、ってか何してたの？ずっと二か月間実家に居たの？旅行とか行っていないの？」

元子「謹慎中だよ私、旅行なんて行くわけないじゃん」

豊介の声「そうだけどさ、友達と遊んだりとか、色々あんじゃない」

元子「なんもしてないよ、しいて言うなら勉強してた」

豊介の声「勉強？何の？」

元子「物理の」

豊介の声「物理？何で？どういう事？」

元子「お父さん物理教師だから」

豊介の声「え？まあうん、そうですか」

元子「そっちは何してたの？」

豊介の声「いつも通りよ」

元子「そうですか」

豊介の声「興味な」

元子「なんか想像つくもんだって」

豊介の声「そう？まあでも、反省はしてるよ」

元子「うん、私も」

豊介の声「…あ、観覧車でも乗ろうかな」

元子「いきなりどうしたの？」



豊介の声「近づいてきた、観覧車が」

元子「……近く歩いてるだけでしょ？」

豊介の声「錯覚するぐらいでかくてさ」

元子「普通そういうのってさ、大人になってから見たら、小さく感じるものじゃないの？」

豊介の声「地元民は意外と乗らないんだよね、小っちゃい頃乗って以降は。だから遠くから見てばっかだったから、忘れてたわ、こんなにでかかったんだーって」

元子「そういえば大学でそっち行った時すぐに乗った、友達と」

豊介の声「観覧車は敵わないべ、こっちには」

元子「うん、いや、ちよっと待って、あるわ

観覧車」

豊介の声「嘘つけ」

元子「ううん嘘じゃないよ、日本最古の観覧車」

豊介の声「日本最古？」

元子「私も子供の頃乗って以降乗ってない、

一緒に乗ろう？忘れてた、一緒に乗ろうよ

観覧車」

豊介の声「えっ？」

元子「ちよっと待ってて」

と、電話を切り走り出す元子。

○よこはまコスモワールド・入口（夜）

豊介、携帯を見ながら、

豊介「なんだよ」

と、園内に入って行く。

○函館・青柳坂（夜）

元子、走っている。

○函館公園こどものくに・入口（夜）

元子、辿り着く。

元子「はあはあ、つて、やってるわけないか」

元子、地面に四つん這いになる。

元子「しかも、はあはあ、冬は営業してないんだった」

元子、園内に背を向けて柵に寄りかかる。

元子「あー疲れた」

元子、豊介に電話を掛ける。

○大観覧車・乗車入口（夜）

豊介、立っている。

着信が鳴り、電話に出る豊介。

豊介「もしもし」

元子の声「はあはあ」

豊介「何？」

元子の声「着いたよ、何？もしもし」

豊介「大丈夫？乗っちゃうよ？」

元子の声「いいよ、早く乗って」

豊介「なんだよ」

と、ゴンドラに乗り込む豊介。

○同・ゴンドラ内（夜）

豊介、座っている。

ゴンドラのドアが閉まる。

周りの雑音が消え、一気に静かになる  
車内。

○函館公園こどものくに・入口（夜）

元子、柵に寄りかかっている。

突然目の前が明るく照らされる。

振り返る元子。

園内がライトアップされている。

元子「……え？」

豊介の声「早く入ろうよ」

横を見る元子。

そこには豊介の姿が、

豊介「早くいこーぜ」

元子「うん」

入って行く二人。

○同・園内（夜）

元子と豊介、二人だけの園内ではしゃいでいる。

豊介、ベンチで休んでいる。

元子、走ってくる。

それを見ている豊介。

元子、来て、

豊介「あれ、なんか痩せた？」

元子「痩せてないよ、実家に居てむしろ太った」

豊介「そう？今なんかキュッてなったよ」

元子「んなわけないでしょ、ほら次いこ」

豊介を引っ張る元子。

元子、上着を脱いで誘惑する。

豊介、負けじと誘惑する。

円の軌道上をとって、相手と対面になってゆつくりと移動する二人。お互いに挑発し誘惑し合っている。

と、元子の道が行き止まり。

豊介、止まった元子にゆつくりと近づいていく。

元子 M 「あれ、あんなにスラッとしてたっけ？」

豊介、ダサいダンスをしながらも、徐々

に元子に近づいていく。

元子M「待って！あそこが、あいつのあそこが、あんなに盛り上がって」

豊介、GLAYのTERUばりに両手を広げる。

元子、豊介に抱きつく。

元子「ああああん！」

○大観覧車・外観(夜)

ゴンドラが一つだけ揺れている。

○(戻って)函館公園こどものくに・園内(夜)

二人の男女が激しく乱れ合う影が映る。

○函館公園こどものくに・園内

営業再開初日、たくさんの家族連れで賑わっている。

元子、近くを通り、子供達を見ている。  
すると、吐きそうになる元子。

元子「え……うそ？」

○元子の実家・和室

元子、テーブルを挟んで茂雄と文代、  
座っている。

元子「妊娠したかも」

茂雄「……」

文代「……病院は行ったの？」

元子「まだ、でも多分そう」

茂雄「……」

文代「……ちなみにお相手は」

元子「……」

茂雄「その男連れてこい！」

○岩本宅・リビング（朝）

豊介と昭恵、朝食を食べている。

豊介「函館に行くてくる」

昭恵「そうかい」

豊介、無心でご飯を頬張る。

昭恵「私のところも食べていいよ」

豊介「ありがと」

○新幹線・車内

豊介、座っている。

×  
×  
×

豊介、座っている。

×  
×  
×

周りの乗客は皆寝ている。

豊介、起きている。

×  
×  
×

豊介、座っている。

豊介「……妊娠？」

○函館駅

駅から出てくる豊介。



○ラーメン屋・外観

暖簾をくぐる豊介。

○同・店内

ご夫婦で営んでいるお店。

豊介、豚骨ラーメンを食べている。

妻「お兄さん見ない顔ね」

豊介「いや、自分は不器用なんで」

豊介、ラーメンを完食し、水を飲み干して、

豊介「ごちそうさん」

と、店を出る豊介。

妻「……あれどういう意味？」

夫「さあ」

○函館・八幡坂（夕）

豊介、上っている。

先には元子の姿が、  
立ち止まる豊介。

豊介「久しぶり」

元子「久しぶり」

豊介「確認なんだけどさ……、そこまでの久しぶりじゃないよね？」

元子「私もそう思ってた」

豊介「……し、してたよね？小さい遊園地みたいな所で」

元子「……うん」

豊介「おかしいの分かってるけどさ、二人だけだったよね。ネットで見たけど『こどものくに』って言うんでしょ？俺行ったこともないのに、ハッキリと覚えててさ」

元子「うん、電話で言ってた日本最古の観覧車がある所」

豊介「そうそれ、日本最古のって書いてあった」

元子「……未だに信じられないけど」

豊介「その上着、あの時着てたやつでしょ？」

元子「……違うし」

豊介「え？」

元子「あの時はもっと大きな上着着てたでしょ？」

豊介「そうだっけ？でも黒だったよね？」

元子「うん黒だったよ、でも今みたいにピタッとしたのじゃなくて、ボタッとしたのだったよ」

豊介「……」

元子「豊介はジーンパンにTシャツでしょ？黒の」

豊介「いや、グレーのTシャツ」

元子「……それは暗くて分からない」

豊介「うん、それはしゃーない」

少しの間。

元子「じゃなくて！」

豊介、また上り始める。

豊介「夢じゃないかなと思ったけど、確かな感触があった」

元子「誰も触れられないような、立ち入ることとできないような、大げさじゃなく、そんな感じだった」

豊介「俺、観覧車の中で寝てて、気付いたら  
一周してて、店員さんに起こされて、そし  
たらまた横浜に戻ってて」

元子「私も、気づいたらくしゃみしてて、気  
付いたら上着脱いでて」

豊介「……お父さん、怒ってる？」

元子「めっちゃ怒ってる『どういことだ』  
って」

豊介「何て説明したらいいの？」

元子「分かんないよ」

豊介「そもそも説明しなくて、というか、妊  
娠して、事の経緯話す人なんか居ないか」

元子「……さっき病院に行ってきた」

豊介「先生何て言ってた？」

元子「……簡単に言うと」

豊介「うん」

元子「……想像妊娠だって」

豊介、元子の前に辿り着く。

豊介「……え？」

元子「……」

豊介「……え、どういう事？」

元子「妊娠してないってこと」

豊介「……でも、したよね？ 感触あったよね？」

元子「したよ、でもイコール妊娠じゃないでしょ？」

豊介「そりやそうだけど」

元子「私にも分かるよ、したってこと。ってか二人にしか分からないよあんなこと。ただ妊娠はしてないってさ、お医者さんが言ってた」

豊介「……そっか、身体は大丈夫なの？」

元子「うん、全然」

豊介「良かった」

元子「だから余計どうやって説明しようかなって、恥ずかしいし」

豊介「……俺に任せろ」

○元子の実家・和室（夜）

元子と豊介、テーブルを挟んで茂雄と

文代、座っている。

茂雄「ん、んっ、おほん」

文代「お父さん、もう」

元子「……」

豊介「娘さんを僕に下さい」

元子「え？」

茂雄「……その前に、話さなきゃいけない事があるんじゃないか？」

文代「色々と唐突ね」

茂雄「（文代に）考えてもみろ、こっそりと二人で会って、こっちに来たのに挨拶もなしとは考えられん。（豊介に）弄ばないでもらっていいかな？うちの元子を」

元子「そんな言い方」

豊介「弄ばれたのはこっちの方です」

茂雄「なっ……こいつ」

豊介「僕は、元子さんが教えている生徒の一人でした」

茂雄「……」

文代「……そうだったの？」

元子「うん、でも卒業してからね、付き合ってたのは」

豊介「最初に僕を、大人の世界に、新世界に連れてってくれました」

元子「ちょ、何言ってるの？やめて。お父さん私実はね」

豊介「（遮って）僕に無いものを元子さんは持っています！料理ができない、音楽が分からない、電車の乗継が分からない、風邪ひいた時に何科に行ったらいいか分からない、検査結果の陽性陰性って、どっちが患ってる方か全然分からない！全部、元子さんが教えてくれました」

元子「……それは別に」

文代「（元子に）黙ってなさい」

茂雄「……君はどうなんだ？」

豊介「……」

茂雄「君はいつたい何ができる？元子の為に何ができる？」

豊介「……何もできません」

茂雄「ほらな、夫婦っていうのは、お互いを  
補い合い、助け合いながら歩いていくもん  
だ。君は真面目で、仕事熱心なのかもしれ  
ない。しかし、それだけで一緒に生活でき  
るほど、世の中は甘くない」

豊介「分かってます」

茂雄「いや、分かってない」

豊介「僕にできることなんて、これっぽち  
もない……ただ一緒なら……、一緒ならで  
きることがある。僕達は」

豊介と元子、二人で、

二人「二人なら時空を超えられる！」

茂雄「……」

文代「……」

豊介「だから妊娠したんだ！」

元子「いや、妊娠してなかったの実は！」

少しの間。

茂雄「こいつ……できる」

文代「ふふっ」



○函館公園こどものくに・前（夜）

豊介と元子、歩いている。

元子「なにが俺に任せろよ」

豊介「ごめん」

元子「まっ、結果オーライか」

豊介「なんとか」

観覧車が見える。

元子「あ、あれあれー日本最古の観覧車」

豊介「へーあれかー、って見たことあったわ」

元子「そうだった」

豊介「こどものくに、一番しちやいけない所でしちやったね」

元子「うん、そうだね」

豊介「意外とでかいよね、観覧車」

元子「そう？ 私はこんなに小さかったんだー  
って思っちゃう」

豊介「感じ方逆だね」

元子「変なの」

豊介「あ、学校どうなった？」

元子「系列の、別の学校に移動だってさ」

豊介「そっか」

元子「そろそろそっち戻るか」

豊介「……一緒に住んじゃう？」

元子「それ言おうと思ってた」

豊介「ははっ、じゃあ決定ね」

元子「うん」

元子、立ち止まる。

少しして振り返る豊介。

豊介「ん、どうした？」

元子「凄いこと言っている？」

豊介「ん？おう」

元子「すっごいしたくなってきた」

豊介「……何言ってるの？」

元子「すっごい、すーっごいしたくなっ

てきた」

豊介「え、今？」

元子「……欲しい」

豊介「えええええ？」

元子、ゆっくりと豊介に近づいていく。

周りを気にする豊介。

元子、さらに近づいていく。

豊介、つばを飲み込み、GLAYのTERU  
ばりに両手を広げる。

元子、豊介の前まで来る。

豊介にキスしようとする元子。

元子「いや臭っ！」

と、やっぱりやめる。

豊介「……」

元子「豚骨？」

元子、豊介を嗅ぐ。

元子「いやちよ臭っ！」

豊介「……」

元子「……」

豊介「えー」

元子「……」

豊介「……なんだよ」

元子「こんな所でキスするなって事か」

豊介「へっ、そうだな」

○元子の実家・前

豊介、茂雄に頭を下げる。

元子と豊介、駅まで向かうとする。

茂雄、二人を引き留め、駐車場に向かう。

文代、笑っている。

#### ○道路

茂雄の運転する車が走っている。

#### ○車・車内（走行中）

茂雄、運転席から話しかける。

茂雄「新居が決まったら連絡しなさい」

元子と豊介、後部座席から答える。

元子「分かった」

豊介「すみません、送ってもらっちゃって」

茂雄「正月か盆には、年に一回でいいから顔

出しなさい」

豊介「分かりました」

茂雄「次は相対性理論じゃなくて、量子論を教え  
えてやる」

豊介「……量子論？」

元子「気にしないで」

○函館駅・前

車が停まっている。

茂雄、後ろのドアを開け、荷物を降ろそうとするが、足元がおぼつかない。

豊介、代わりに荷物を降ろす。

豊介「あ、すみません」

茂雄「……」

元子「じゃー私達行くね」

豊介「……」

茂雄「娘を、宜しくお願いします」

と、頭を下げる茂雄。

豊介、深々と頭を下げる。

豊介「……はい」

元子と豊介、駅構内へと入って行く。

茂雄、車に乗り込む。

○車・車内（停車中）

茂雄、サンバイザーを下げる。

写真が一枚挟まっている。

写真を手取る茂雄。

函館公園こどものくにの観覧車に乗っている、茂雄と小さい頃の元子の２ショット写真。

○岩本宅・リビング

豊介と元子、座っている。

昭恵、おはぎを持ってやってくる。

昭恵「どうぞ食べて」

元子「わー美味しそう」

豊介「え作ったの？」

昭恵「私もまだまだいけるわ」

元子「いただきますーす」

おはぎを頬張る元子。

豊介「俺も」

おはぎを頬張る豊介。

昭恵「ふふっ」

元子「そうだこの後、観覧車乗りに行かな

い？」

豊介「面倒くさいからいいよ」

元子「えなんですよ、行こうよ。お母さんも一緒はどうですか？」

昭恵「この子、観覧車乗れないわよ」

少しの間。

元子「え？」

豊介「乗れるわ」

昭恵「嘘おっしゃい」

豊介「こないだも乗ったし」

元子「え、本当ですか？」

昭恵「本当よ、小さい頃『こわいこわい』って言って乗らなかった」

豊介「すごい小さい時の話でしょ、やめてよ」

昭恵「二十歳過ぎてからじゃなかったかしら、初めて乗ったの、しかも夜ね」

元子「夜？」

昭恵「昼間は嫌なんじゃない？下が見えるから」

元子「へー、そうなの？」

豊介「んなわけないじゃん」

昭恵「こんな息子を、宜しくお願いします」

元子「あいえ、こちらこそ宜しくお願いします  
す」

昭恵「あ、そうだ、お茶持って来なきゃ」

元子「わたしが」

昭恵「いいからいいから、座ってて」

元子「あ、ありがとうございます」

昭恵、台所に向かう。

元子「なんで小さい頃乗ったなんて嘘ついた  
の？」

豊介「嘘じゃねーし」

元子「だから大きく感じたんじゃない？観覧

車」

豊介「……」

元子「別にどっちでもいいけどね」

豊介「そんなことより、あの事言うなよな」

元子「ふふっ、言っても分からないよ、二人  
だけの思い出しよ」

豊介「おう」



元子「岩本元子、絶対生徒にいじられるなー、  
病院でも聞き返されて、電話でももう一度  
お名前よろしいですか？つて聞かれるな  
ー」

豊介「うん、そうだね」

元子「めんどくせっ」

《了》